

私達の生活空間である市街地、住宅地、公園緑地などで見かける様々な植物の多くは、明治以降に外国よりもたらされたものであるが、今ではすっかり市民権を得て、誰もが札幌土着種と疑わなければかりか、札幌のまちを代表する植物となっているものすら多くある。

私達の先人が、外国より様々な文化や技術を導入し、それを消化する中で現在の生活文化を築き上げていったように、植物の世界でも、これまで通りたくさんの外来植物を取り入れ、札幌の風土に融け込ませてゆくものと期待される。

ここでは、札幌のまちを代表するようになった植物から、今後ますます増えてゆくことが考えられるニューフェイスまで、様々な植物を紹介してみることとする。

ライラック

いつころからライラックが札幌を代表する花となったのは定かではない。単純に市の木に制定されたから、というのではなく、明治の導入以来多くの市民に愛され、庭を飾って来たその実績から、ごく自然にまちの花であるという意識が定着して来たものであろう。

五月末の開花期ともなると、庭先や公園などいたるところに甘い香りを放つ花房が咲き誇っている。ちょうどこの頃は、冬のなごりの寒さと、ようやくやって来た春の暖かさと同居する不安定な季節でもあり、「リラ冷え」などというロマンチックな呼び名が出来る所以でもある。

ライラックは、明治の初めにアメリカの宣教師によってもたらされたものといわれ、彼らの故郷であるアメリカ北東部の気候とよく似ているこの地で急速に増えていった。植物園旧事務所前の大株は日本最古の株といわれ、昭和の初めに移植された時に、運んだソリが穴から抜くことができず、そのまま埋め込まれているという「伝説」がある程の見事な株である。

といっても穴を掘ってソリを確認するといった不粋な人は居ないので、真偽のほどは分からないにしても、山鼻などの古い住宅地には四〜五段、根元から子供の足程もある太い幹を何本も出している大株をよく見かけることから、かなり昔から庭木として定着していたことが窺えよう。

一般にライラックといっても、色の濃淡、花房の大小、花弁の形など随分変化があることに気付かれた方も多いと思われる。ライラックの本場アメリカでは、数百もの品種が作り出され、専門書まで出ているくらいであることから、我が国のライラックも、全くの原種ではなく、また一本の苗木から広まったものでもなく、断続的に様々な品種がもたらされたものが広まっていったと考える方が自然なのではないだろうか。

白花のライラックは、紫花のものとは比べて大きく異なる点として開花期が一週間以上も早いことが挙げられる。まだ十分に暖かくはなっていない五月中旬に咲き始めるけれどもその花色ゆえ寒々しいイメージがあるために、庭に植えられることは少ないように見受けられる。花も小さく花房もあまり豊かではないこともあるかも知れない。



ハンガリーハシドイ

赤紫で葉や花房の小さいヒメライラックもよく見かけるようになって来た。

ライラックの品種の導入はこれまできちんとした形で行われなかったことから、品種名が付いたものはほとんど出回っていない。最近ようやく導入試験等も行われるようになって来たので、手軽に様々な品種を園芸店で買うことが出来る日も近いと思われる、第二のライラックブームが出現することも夢ではないような気がする。

ライラックを含むハシドイの仲間には、中国と東ヨーロッパを中心に数十種あり、北大植物園にあるコレクシオンにより様々な花型、花色の花を見ることが出来る。これらの多くはライラックより約一カ月遅れて咲くことや、庭・公園樹として十分に通用する美しい花を咲かせるものもたくさんあり（現にヨーロッパでは様々なハシドイの仲間が使用されている）、これらの増殖・普及により、多彩な緑地空間が作り上げられることを期待したいものである。

ニセアカシア

札幌の最もいい季節は何といっても初夏であり、六月中旬に行われるさつばろまつりの頃ともなると肌寒さもなくなり、ようやく冬の名残が一掃された感がある。

ちょうどこの頃になると咲いて来るのがニセアカシアの白い花で、ライラック同様小説等で北国のイメージを植えつけられた植物であるといえよう。

名前に「ニセ」とはかわいそうと、学名のロビンアを使おうとか、ニセを取ってアカシアでもよいではないか、など一時話題になったことがあった。別名ハリエンジュにしてもあまりポピュラリティを得られそうもなく、結局本物のアカシアは北国では育たず、アカシアと呼んでも混同しないだろうということで、一般にはアカシアの名が定着しているようである。

街路樹としての歴史も長く、市内の街路樹本数のトップを独走して来たけれども、近年すっかり風向きが変わってしまい、新たな植栽はしないとまで言われてすっかり嫌われものになってしまった。

その理由としては、風で倒れやすい、枝がよく伸びて暴れやすい、虫がつきやすい、枝に鋭い刺がある等々が挙げられている。おまけに毎年強剪定を繰り返されるため、街路樹で花を見ることは少ないくらいとなっており、誠に寂しい限りとなっている。

本来のライラック色とは、淡い赤紫色を指しているが、実際の花色で最も多いのは淡い青紫色の株である。しかし近年では極く普通のタイプのライラックは嫌われる傾向があり、代わって濃い赤紫色の花や、花弁が丸味を帯びて花房の豪華なもの、或いは八重となって花房も在来種の三〜四倍もあるものなどが人気となって来ている。このほか、花が



明るいローズピンク色の花を咲かせるハナアカシア



ニセアカシアの本来の姿を残す並木
(円山総合グラウンド脇)

本来のニセアカシアの良さを残している並木としては、円山総合グラウンド脇、真駒内自衛隊脇などで、南郷通りのものは最も最後に植えられた並木であろう。近年では近郊の里山に野生化しているものがよく目立ち、中でも円山・旭ヶ丘・藻岩山の山裾では、白いベルトとなっているのが市街から遠望できる程である。

ニセアカシアは、マメ科植物特有のヤセ地に耐える力、生長の速さなどが大きな長所でもあり、また近年では短所ともなっているが、花時にその一枝を手折って花瓶に挿してよく見てみると、甘い香りを放つ白い花房の美しさに改めて気付かれる人が多いのではないかと思われる。最近ではエディブルフラワー（食用花）の一つとしての人気も出ていることから、復権の可能性もあるのではないだろうか。

ニセアカシアには様々な変種・品種があるが、もともと普及してもらいたくないものにトゲナシニセアカシアがある。南四条通の西八一〇丁目にかけて、ケヤキやトチノキと共に植えられているのはすべてこれで、名の通り枝に刺が無いばかりでなく、樹形がこんもりとして枝が暴れにくく、結実しないことから無闇に殖えることもない。花は全く同じであることから、これに交替してゆけばニセアカシアに対する苦情も減るような気もする。

街路樹として増えているものにバラソルアカシアがある。その名の通りこんもりと円くまともな樹形は面白いが、葉が散ってしまうと少しみづともなくなってしまう。これには残念ながら花がつかない性質がある。

これによく似た樹形で明るいローズピンクの花を咲かせるハナアカシアが一時よく植えられたことがある。バラソルアカシア同様、ニセアカシアを台木に二層少し上に接木されたもので、花後すぐに枝を切りつめれば一年に三回も花を咲かせることが出来るユニークな樹であるが、接合部が積雪の重みで折れやすく、街路樹としては使われなくなったようである。

ニセアカシアと同じ樹形で、花が濃いピンクのロビニア・ピスコサという素晴らしい種類も、稀に植木屋の畑で見ることがあるが、何故か普及しないている。淡いピンクの花を咲かせる個体は、中島公

園、大通、知事公館などあちこちにあるが、あまり気付かれないようである。葉が鮮黄色のオウゴンニセアカシアも、好みが分かれるせい、あまり普及しないもの一つである。

サクラ類

我が国を代表する花として、北国でも当然花見といえばサクラを思い浮かべるだろうが、北海道では本州以南程強烈なイメージを持っていないような気がする。というのは、サクラの代表種であるソメイヨシノや、花の名所の中心となる華麗なサトザクラの類が、道南の函館、松前ではまだしも、札幌近辺では生育が芳しくないことがあげられる。

札幌市内のサクラの名所である円山公園でも、多くが自生種のエゾヤマザクラであり、ソメイヨシノはわずかである。またサトザクラの中でも耐寒性が強く、人気のある通称ヤエザクラ（ほとんどが関山であるといわれる）は花期が遅く、花見を待ち焦がれている人にはとても待ち切れないということもあるのだろうか。また、サトザクラの中には、札幌で生育できる種類も多くあるのに、昔から店頭に幾つも並べていても、売れるのは結局紅味の最も強いヤエザクラのみで、白や淡いピンクの花は絶対に売れないそうである。

冬の間白いものに取り囲まれて暮らしていると、どうしても紅味の強いものへのあこがれが強くなり、決して育たない訳ではないソメイヨシノや様々なサトザクラよりも、多少無骨な雰囲気はあるものの、葉色共々暖か味のあるエゾヤマザクラや、賑やかな重弁のヤエザクラに人気が集まることになるのだろうか。

本州の花見のようにソメイヨシノの花霞や花吹雪の中でやるのとは違うけれども、ようやく冬が終わったことを実感するために、たとえポツポツとあるエゾヤマザクラでも目に入れば、多少の寒さも我慢できるといのが北国の花見風景のようである。

暖地性の花

明治以降、開拓などで本州以南より渡って来た人たちは、故郷を偲ぶために様々な植物を持ち込んだといわれている。思わぬ所で思わぬ植物に出合ったりすることがあるが、こういった由来を持つものもあるのかも知れない。ただ一般に、北海道で何代も暮らしていても、本州以南の暖地への郷愁みたいなものはあるようで、苦労して暖地産の植物をそだてている人は意外と多いような気がする。そんな植物の幾つかを紹介してみることにする。

暑い夏の盛りに、柔らかい葉の繁みの上に淡いピンクの眉刷毛のような花を咲かせるネムノキは、どうみても南国の雰囲気を持っている。道南地方だと割と普通に見られるが、札幌周辺になると非常に珍しい存在となる。

寒風害に弱いらしく、建物の南側で風当たりの弱い所に植えておくと割とよく育つが、ある程度まで大きくなると急に枯れることが多い。近年は札幌も都市化の影響もあり、また暖冬が続いているせい、冬枯れを起こすことも少ないが、限界に近いことは確かなことから油断は出来ない。



南国のイメージのあるネムノキ

ネムノキは南国の花らしく、かなり暖かくならないと芽も吹いてこないのが心配になる。また夏が暑ければ暑いほど枝の伸びも良く、色の濃い花を次々と長期間にわたって咲かせてくれる。昔ネムノキを植えた家のおばあちゃんから、今年もよく咲きましたよ、と便りをいただくことが何よりも楽しみであるが、近年暖冬と暑い夏が多いことから、ネムノキの生育はさぞかし順調なことであろう。

五月の中頃に、枝先にライラック色の大きな花を咲かせるキリの木も、独特の雰囲気を持った植物である。小樽では珍しくないのに、わずかに四〇〇程離れた札幌ではかなり珍しい部類に入る。

キリは生長の速い樹木として知られている通り、札幌でもたちまち大きく育って花を咲かせるようになるが、生長の速さゆえ幹の充実が遅れるせいかなるが、

胴枯れを起こして枯れ込むものが目立つようである。円山公園にもかつて二〇数株にも育った大木があったが今は無く、動物園の脇にあった木も毎年美しい花を楽しませてくれていたが、枯れてしまった。ただキリは根から芽を吹く性質があることから容易に殖やすことが出来、このため親木が枯れても仔生えが再び伸びて来たり、別の場所を持って行って大きくなることがあるようで、結構花時には見かけることがある。

これほどの美しい花を咲かせる樹でありながら、公共緑化樹としては全く植えられないことのない植物も珍しく、もったいない感じがしないでも無い。

秋になると必ずといっていい程話題になるのがカキノキである。北大植物園の温室脇にある大木は有名であるが、その品種、由来等は分かっていない。洗柿で、秋遅くまで暖かく強い寒さに会わない年には渋が抜けて食べることが出来るそうである。

最近出回っている柿はタネのない平核無(通称オケサ柿)がほとんどであるが、昔のように



キリ



カキノキ

タネの一杯入った柿を食べた後で、庭先にタネを埋めると、翌春芽が出て来たものである。このようにして育ったカキノキは決して食べられるような旨い実をつける訳では無いが、うまく育つと結構珍しがられるようである。

豊平緑のセンターにあるカキノキもこうしたものの一つで、近くのアパートの庭先で実もつかないことからやつかいもの扱いされていたものを引き取ったものである。

移植後もさっぱり実が着かなかつたけれども、ようやく一九八九年秋に実をつけるようになって、訪れる人の目を楽しませてくれている。

私が知っているこの十数年の間でも、かつては越冬しづらかった植物が、無難に冬を越すようになって来ている。常緑針葉樹ではクロマツ、ヒマラヤシーダー、カイヅカイブキなど、常緑広葉樹ではアオキ、ヒイラギナンテン、常緑性のツツジ類など、落葉樹ではアメリカカハナミズキ、サルスベリ、アメリカノウゼンカズラ、エニシダ、メタセコイアなどが挙げられる。

これらはすぐに地球の温暖化につながるものではないだろうが、少なくとも札幌が大都市化し、発生する熱によって温暖化していることだけは確かかなようである。マイナス二〇度はおろか、一五度以下になることも珍しくなつて来ており、雪の量もめっきり少なくなつてきている。

しかし一九八三年冬のような大規模な寒害はいつでも起こり得る現象であり、これら暖地産の植物が完全に市民権を得ることはまだまだ先のことではないだろうか。

珍しい花

石山通り(西一丁目)に面した天理教の境内に、七月頃白く美しい花を咲かせている大きな木があるのに気付かれた人は多いかも知れない。これはアメリカキササゲという、名の通り花が終わると長い豆果をぶら下げる面白い木で(マメ科ではなくノウゼンカズラ科の植物)、葉や花はキリとそっくりという風変わりな樹木である(キリはゴマノハグサ科)。

同じ仲間に中国原産のキササゲがあり、花はクリーム色でやや小さく、豆果も細いかわりに鈴成りに下げるものである。こちらの方は種子が漢方薬として重用される(利尿薬として有名)ことから、あちこちの寺の境内に多く、豊平の国道沿いの寺にはたいいてい植えられているのが道路からもよく見える。

北国には、高木で花の美しい樹木が割合少なく、アメリカキササゲのような観賞価値の高い樹木はもっと普及してほしいものである。

ギョリュウは、姿が特異なことからよく目立つ樹木であるが、姿のみならず、性質もなかなかユニークなものがある。遠目にはよく分からないが枝を手にとると葉は鱗片状となつてまるでトクサのようであり、いささか頼りない(沖繩でモクマオウを初めて見た時、実に似ていると思つたことがある)。最もユニークな点は花にあり、六月頃枝先に淡いピンクの花を咲かせた後、八、九月にかけて再び花を咲かせる性質がある。



アカバナヤエサンザシ



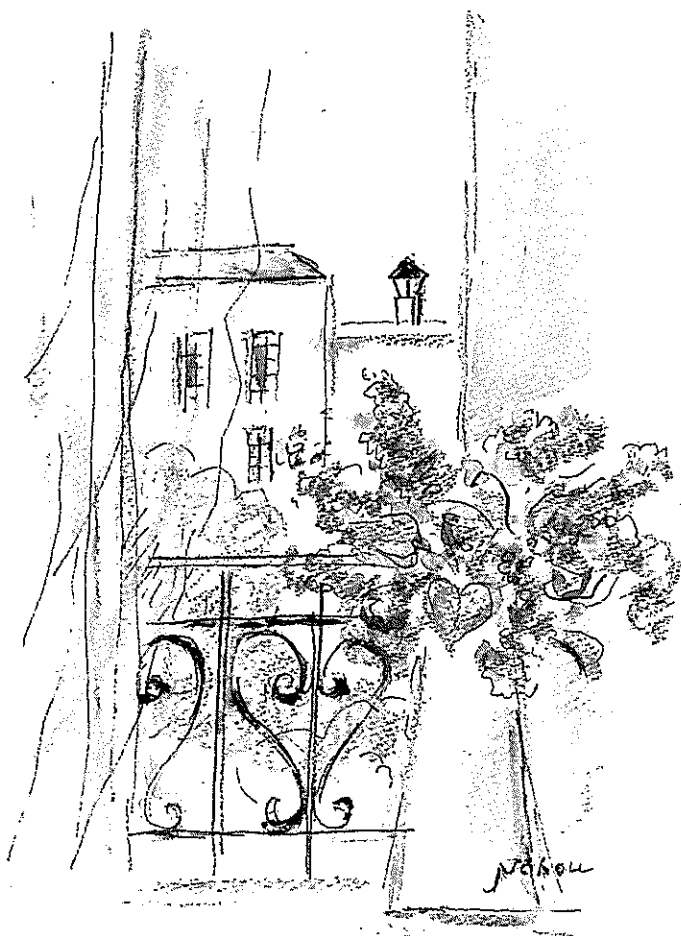
キングサリ

ウの花の鮮やかさに似て、非常に新鮮な感じを与えるものである。
 北欧では小住宅の庭先に必ずといっていい程植えられているのが印象的であったが、ライラックに似たコンパクトな樹形はこれからますます人気が出る要因となるだろう。
 かつては北大（農場や工学部前）くらいでしか見なかったけれども、最近では種苗会社の通販カタログなどにも載っていることから、一般家庭でも植えられるようになって来たと考えられる。種を播けば簡単に苗を作ることができるので、今後急速に増えてゆくことが期待される。
 欧米では極く一般的でありながら、我が国ではほとんど見られない樹木にサンザシの仲間がある。北米には数百種も分布しており、アメリカの国花となっているほか、イギリスでもメイフラワーとして庭の主木となっている感があり、庭・公園樹、生け垣、刈り込み等様々な使い方をされている。

日本には三種分布しており、観賞価値は十分にあるが使われることはほとんど無いのが現状である。外国から導入されたものが、極く稀にはあるが植えられていることがあり、花色が紅で八重咲きのアカバナヤエサンザシや、鋭い刺が難点ではあるが、白い花や赤い実の美しいアーノルドサンザシなどを見かけることがある。
 ライラックもそうであるが、東京を中心とした地方で育ちにくい植物は、大手の種苗会社も積極的に導入しようとはせず、寒冷地はいつまでも除外されることが多い。北国に向けた植物はどうしても独自のルート

本場中国ではさらに三回目の花を咲かせることから「三春柳」の名があるそうであるが、咲き続けるのではなく、期間を置いて再び咲く花は非常に珍しいものである。
 ギョリュウは頼りなく見える樹木であるが、実は大変強健な植物で、砂漠のような乾燥地から水湿地、果ては海岸の強塩地の緑化にまで用いられる程である。
 住宅地で小ぢんまりと育っている姿から想像も出来ないようなタフネスさを、存分に発揮させてみたい気がする。
 ちょうどフジの花が咲く頃、ライラック程の木から鮮やかな黄色の花房を下げるキングサリを見かけることがふえて来た。英名でゴールデンチェーンとあるように、フジによく似た花房は、ちょうど春先のレンギョウ

を作った積極的に導入することを考えてゆかないと、開拓初期に直接欧米からもたらされたものにいつまでもしがみついているのは、これまた寂しい限りであるといえよう。
 確かに、在来種の活用を図らないで無闇に外国から導入することは、決して本筋ではないといえるかも知れない。しかし、まちを彩る花は多様さ、華やかさ、そして丈夫さが命であり、特に在来種にこだわる必要はないのではなからうか。
 これまで開拓期以降約百年の間に、外国より導入されて、そして生き残り、定着したものは、全体から見れば極く一部でしかないと思われる。しかしその一部の植物は生き残るところか、札幌を代表する植物となったものまであるように、自然と住む人に受け入れられるようになってきた歴史がある。
 今後新たに導入するものについてもこれと全く同様のことが言える訳で、その中から第二、第三のライラックが出現する可能性があることを考えると、胸がわくわくして来るのは一人私だけののだろうか。



窓辺の花〈八木伸子〉